

# 大理石の山を見て思う

## カラララの大理石採掘場から

番地銘石代表取締役社長

番地常夫



御影石と並んで有名な石に大理石があります。写真は18年前に見に行ったイタリア北部のカララ地方の採石場です。1 白いところが採掘現場で、いつから掘っているのと聞いたところ、だいたいローマ時代から!との

こと。2000年は掘りつづけている訳です。しかも、大理石の鉱脈は山の上から遠くに見える地中海の海底までつながっていて、人力で採掘していく限り無尽蔵とも言える巨大な規模です。山には大地主がいて、石屋が採掘料金を払って採掘し加工し



ています。作業員と石を切り取る機械です。2 ダイヤモンドのチップをつけたワイヤーで豆腐を切るように石を切断します。いくらでも大きいサイズがとれますが、運ぶトラックに載らないとか、運送途中の橋が傷むとかの制限で、使う石の大きさが決まります。3

彫刻職人が作業中です。4 カトリックの家庭には、マリア様の像を良く見かけます。日本のお地藏様の様な感覚ですね。5 石像専門の職人が白い石粉だら



けになって彫っています。

屋根裏部屋にモデルにするひな形の石膏像が大切に保管してあります。6 ところどころについている黒っぽい点は製作の重要な位置の基準点で、ここにコンパスのようなものを当てながら、お手本の石膏像と加工途中の大理石を比べて複製していきます。

こうした作り方をみると、生産工程をしっかりと分けて確実に作業するヨーロッパの合理性を感じます。

祈りの形を造る石屋でも、資本主義経済のルールのなかです

から、イタリアもリーマンショックや、安い海外製品との競争など経済変動の波を受けています。埃っぽくて重くて古臭い石屋はイタリアでも若い人にとって魅力的な職場ではなくなっているようです。

それでも、作業している職人を見てみると、埃にまみれてかたいイタリアの職人の中に、日本人と同じ様なもの作りへの誇りを感じました。



イタリアでカトリックの教えが時代と共に変容しながらも続いているように、日本の宗教観も、時代の波を受けながら根強く受け継がれていると感じています。

世界をみれば、(ちよつと粗っぽくて不謹慎ですがお許しください)戦争が得意な人―武士、商売が得意な人―商人、ものづくりが得意な人―職人、祈りの道の実践が得意な人―宗教者とそれぞれの特性があるように思います。日本は職人が多いでしょう。また同じ人でも、ある時は職人であり、ある時は商人であり、ある時は武士であったりと役割が変わることもありま。時代は変化しても、私たちは石でものづくりに励みながら、心の大切さを石に込めていきたいと願っています。

## 大切なおもいを永く伝えます

**参考** 当社施工の青森商業高校百周年記念碑 平成 14 年  
 青森商業高校百周年記念碑 旧校舍跡地 現在の青森市民体育館西側

### 1 文字の彫刻作業

大きいので横にしたまま、  
 高压で砂を吹き付けて彫ります。

### 2 台座石を設置

### 3 本体を吊り上げ設置

### 4 完成

旧校歌を大きく題字にしました。  
 作詞 土井晩翠氏、  
 作曲 釜范善作氏の  
 格調高い校歌です。

